

♪ 2018年度

poco a poco

♪

Nr. 20

2019年1月28日(月) 文責: プファイル・辰巳

冬将軍がやってきた!

お天気は良いけれどキーンと氷点下に冷え込んだ先々週末。少し気温は緩みましたが、雪やみぞれになった先週末。ようやくドイツの冬らしくなったな、と思ったものです。でも、ぐっと冷え込んだせいでしょうか、とうとう体調を崩す人も出てきたようですね。

不用意に薄着で外出したり、汗を拭かずにそのまま身体を冷やしたりしないように、自分でも注意しましょうね。小学部のなわとび大会も近づいています。体調を整えて本番に臨んでくださいね。



<作曲家のこの一曲 ㊿ 最後のロマン派

ラフマニノフ「パガニーニの主題による狂詩曲」>

19世紀末(1873年)ロシア帝国オネグで生まれ、第2次世界大戦中の1943年にアメリカで亡くなったセルゲイ・ラフマニノフは最後のロマン派作曲家と呼ばれています。裕福な貴族階級出身の両親のもとに生まれながら、9歳の時に破産、その後両親は離婚して、不幸な少年時代を過ごしました。しかしながら、彼の音楽的な才能、特にピアノ演奏は周囲の認めるどころであり、ペテルブルク音楽院からモスクワ音楽院へと、奨学金を得ながら若年特待生として入学を許可されました。モスクワ音楽院ではチャイコフスキーに出会い、同級生はスクリャピンもいました。

若干18歳で、まずピアノ科を大金メダル受賞で卒業したラフマニノフは、さらに作曲科に進みます。作曲家としては挫折と成功を繰り返しながら、十月革命などで激動するロシアを、1917年に脱出し、北欧を経てアメリカへと移住したラフマニノフは、まずピアニストとして活躍をしたそうです。

何でも、ラフマニノフは身長が2メートル近くあり、手足もすごく大きかったそうです。その大きな手を生かして、難しい和音なども楽々ピアノ上で押さ

えることができたそうです。ラフマニノフの生きていた時代は、録音技術が進み始めた時代でもあります。彼自身の演奏の録音も残っており、赤版復刻で発売されたCDで聴くことも可能です。

さて、そんなピアノの名手ラフマニノフが作曲した「パガニーニの主題による狂詩曲」。パガニーニはイタリアの作曲家で、ヴァイオリンの名手でもありました。そのメロディをピアノに置き換え、変奏曲(バリエーション)の形式を取り、ピアノ協奏曲として作曲されたのがこの作品です。

パガニーニの主題と24種類の変奏曲からなる大曲ですが、普通の変奏曲と少し違っている点があります。最初に主題となるメロディを提示し、その後、その主題がどんどん変奏されていくのが変奏曲の常道ですが、この「パガニーニの主題による狂詩曲」では、主題になるメロディは、第1変奏曲(これが序奏になります)の後に出てくるのです。

また、第18変奏曲は特に有名で、この部分だけが単独で演奏されることもしばしばあります。クラシック・ラジオなどを聴かれる方は、耳にされたことがあるかもしれません。YOUTUBEで試聴してみようかと思われる方は、この第18変奏曲から聴いてみるのがよいかも知れません。

ラフマニノフがこの曲を作曲したのは、1931年、スイスのルツェルン湖畔にあった彼の別荘でだったそうです。しばらくここをヨーロッパでの活動拠点としていたラフマニノフでしたが、ナチスの台頭とともにヨーロッパから離れ、アメリカのビバリーヒルズの自宅で、1943年、70歳の誕生日を目前に癌のために亡くなりました。



ほんのちょっとだけ 演奏会情報

フランクフルト・カイザードームのパイプオルガン・コンサート
2月1日(金) 20時から
バッハ、レーガー、ヴィドールの作品ほか

聖カタリーネン教会(ハウプトヴァッハ)のオルガンコンサート
2月3日(日) 18時から
バッハ、クレネックの作品ほか